



俳諧一葉集

^ 5
2179
2



5
明
辨
卷
2177
之



俳諧一葉集附合之部一

延寶五丁巳春

古学庵佛子
幻窓
坎窩



枕青

此梅下生も初音と啼つ下
まーそや怪人可の依
まゝの折る志や逢る身の中に
砂味喰まーすの砂色の下菊
摺跡を差込おすくころも
むろくくく記の男ゆりくく
信章
青
章

晴のけしけをみよるむの月
瓜にさゆけくや曳の山
玉すけしきものさきさるよめ花
印くさひあやう位より一の松
片海一は社形を新しめさえて
友よふとくのさしあひある
青海よのまこ白鷺の橙さき
森のふゆふゆ葉六さき
古葛原ふまれさ道了ふさき
虫鳴かきんむごりあひめ
恋の秋にたさきのさきよ
吉祥天女さるれむの月
青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

あつしけ強強うる山から
松のけしけけけけけけけけ
大星の代をさきかきんひさ
かすみさきさき天竺のきぬ
二
とりのさき女一文の粉をさき
風進退をさきかきん
晴のけしけをみよるむの月
うみさきさきさきさきさき
地すけしきさきさきさきさき
葉の松山葉葉葉葉葉葉
子架の海さきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

たかたか... 山... 谷... 人... 花... 上野...
青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

... 山... 人... 堀... 山...
青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

小松やしらしびハ引き下しハ
其不^しく^しハ^し女^のふ^のの^の志^を
可^らし^の路^のニ^止ハ^ル少^くき^りれ^と
か^しこ^の物^を屋^をき^りし^の松^を
と^りま^して^も長^の物^の松^をつ^つこ^こ
能^因法^沙若^者高^のと^れ
思^つけ^る色^は玉^やや^やつ^つも
こ^のこ^のら^のこ^の眼^のの^月
飢^饑と^し物^をと^りぬ^る秋^の音^を
多くハ^傷心^を其^の上^に風^を
一^葉つ^つ柳^の葉^をや^やけ^ぬる^音
ら^の松^をと^りて^しけ^し

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

お友の身ハ^しあ^かし^のあ^かし^のあ^かし^の
対^の陣^に至^るの^し淨^瑠璃^を
お^のれ^るこ^のこ^のこ^の山^の端^を
松^の風^をや^やけ^ぬる^音の^あ
君^のこ^のこ^の二^布の^下紅^糸
あ^かし^の秋^を青^葉あ^かし^の
月^のす^くま^のこ^の中^に路^を
河^内の^あか^し飛^石
四^角ま^の屋^の里^をと^り
浪^をし^の芦^垣伝^へ
叶^を花^を入^江の^中に^ゆ
や^らし^の一^編松^をあ^かし^の

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名
いしきくハ魔法ト事トト久入尺上
セリシク入おのり
筆端三井の古寺波砂け
落さききし能し喜のち疵
階はぬら目くハ目より
流まはるき手至合ゆ
既手神み一室ゆきをぬひ
白髪殿ハ沙手より能て
つしと向うたきし後山
まけ入新屋ハ小窓の駒を
忍ふ根ハ根のあまをまよりむ
ゆきく手揚し能く事の事

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

唐人と名の月とくしれや
古文書 宣 寺のつり
酒のあなけ越で白雪飛
る物たふしや人のことさや
新のよき能杖の大木大間屋
流しとゆえき事ありき
秤より日本の物もやうけぬん
所し能のまをこつめぬん
花手より禁の里ハ十園子
り坂とゆきハ峰のまきし

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

同年春

信章

松の風 何故あきさうんあう
 くらとくつ 好むけ 叶の春
 かわる人す 雲のまぬの袖ええ了
 けんやぐー ぬ心のとけお
 きてく 中にける方地やー 出ず
 うさ地ぬ 雲けとけさきひき
 海えー くの雲の雲子月すきー
 趣向くくく 船の ぬあき方
 くの千過霜くらえさる秋の風
 雲子く 大用し 羽月の 羽衣
 うつ 蝶く 十の地の山く 雲ひあて
 青嵐 子くひく よきう 子く

松枝の木の葉の夜 雲くあれ
 雲 擔 桶 きりー 村の ぬの ぬ
 夕陽く 生ひあ ぬく 雲の ぬ
 夫子のすくく 山の 端から花
 寓空のむくーの 雲雲さか 雲
 桐雲く 木の 志えら 袖舞
 雲の 雲く ぬの 雲く すみやふ
 汀 五 六 外 こけく ぬの 月
 古里の 雲く ぬの 雲く 雲く
 志賀山の 雲く ぬの 雲く 風
 雲く 雲みや 二 雲の 袖く 雲く
 阿くく 雲く 雲く 雲の 末

あは後う池のうさる石いん
玉子のあやうらくく沈
傳ゆ旨のよらんかきし
上碧葉よるふん秋
付くけもといふるの底か
親類分ハのつれこや
寺中よ大岩ゆれハ所人あり
柳ハみとくうけハ雨
古帳う横迄を引ぬる
火鉢をとく物あつ
うのゆみうのほとく浪の月
河童子のゆけとく秋をさむ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

くそ野きけハそまハ秋の
地獄のゆめくもあつ
飛巻よハくつるえよ
庭子喜ハ秋田の長
釣瓶とく飛巻よハくつるえよ
飛ハくらまら下女うゆ
志賀の信長振くの使
白むくそく葉五十石
田舎の法とくふんた
ゆり以るの秋
床ハ海新解人の室の月
虎の毛ころもわかれゆ

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

くろくしひの藻池の岸をよんて
字もえあつる。秦の法より
三 釣子もみ後福の似をよるうま
まの意はくら乾神の外
瀬戸の虫を捕獲をわらぬま
弁才天より 鮓さくくお
可月ほろ口語をぬ海このま
その夜の不二より足おの山
かんふ屑はいつのまへもま
見よしく成佛をよるまの法
龍女御府をよるまの肉
龍田のま紫豆腐四五丁

おつめ南窓をくく心の二を
人死の志風をさくく
大火車をも袖りのま
やしくしゆるまの松山
三 日本橋らんをよるま
方と尺をよるま
かいりまをよるま
海にまをよるま
浪をよるま
何とて松をよるま
くす柿をよるま
海戸の虫をよるま

物言伝の白紙くよかれく
よかぬの秋く瘰癧^{ニキヒ}何れゆく
かみそくも内付ふくよか月
のくまへけく^とやよの芳
衣冠も既く孫勒の花侍
か^名の海嶽もあぢのま
岩鴉やアんとけく^一子
天くつめく^二虹のつてく
その四隅多門ハ多知を校く
日備のれく^三愚魔やあ
智こお敵^四安全く^五あ
意也ハ^六あふく^七さく^八案の直

人く^一く^二思^三く^四ん^五や^六親^七の^八玉^九意^十
糸^一く^二より^三く^四か^五の^六竹^七 笑
い^一の^二根^三ひ^四く^五艾^六草^七の^八百^九す^十く
寺^一根^二の^三さ^四く^五少^六建^七く^八尺^九く
外^一く^二海^三洲^四今^五川^六寺^七子^八あ
さ^一く^二く^三あ^四く^五く^六三^七条^八寺^九を^十あ
た^一の^二月^三城^四を^五く^六あ^七く^八く^九く^十
浮^一除^二ハ^三い^四く^五く^六横^七町^八の^九あ
と^一く^二新^三葛^四多^五印^六く^七く^八く^九く^十
大^一根^二の^三情^四く^五く^六く^七く^八く^九く^十
新^一根^二式^三本^四草^五を^六漬^七浦^八す^九く
南^一寺^二い^三く^四く^五く^六く^七く^八く^九く^十

窓は晴ハ雪は消さぬわさ
とくろ夫二節まふこーの先
軍ハ節追子膝まをこまみ合
手は、何百きささーの老
寺 寺 寺

同書冬

阿〜の〜もあまの〜は縁汁
居合ぬやゆ〜の玉やれさ〜ん
柳老名さハ丸ハ 藤 原
あ〜の法用とゆ〜ハ他ハ色
海老さこま〜ア〜お〜ハ耐
信章 信德 青 德 章

松青

碧油のほろゆあ〜月まみ
更〜志は〜小使の 飛
み耳やよ〜ア〜き〜の
新波の芦ハ伊〜およ〜ら
屋〜き〜ゆ〜さ〜さ〜
か〜を小袋や袖〜ゆ〜
物〜よ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
干籠四五枚られ〜きの毛色
寺のほ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
み〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
藤野ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

晴つきの坊主も秋やさしくん
手一休り 尺をさるわの月
花のいろ朱鞘を袖も夕可
川やきつ丹紅岸の山も
二 川もさるわさるわさるわ
残竹さるわ 秋空さるわ
風さく物枝百本割さるわ
秋節一掃の紋さるわ
双六の書置さるわ 侍連
宿舎の砂もさるわ
月のあつた島岡さるわ 之瀬川
かゝる底流さるわ

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

小春園の大地さるわ 秋
秋の飯椀さるわ 中
一二秋法さるわ 春
月ハ秋の親仁友さるわ
春さるわ 秋さるわ
胸の并用さるわ 春
秋風もさるわ 秋
秋の秋さるわ 秋
古の秋さるわ 秋
秋の秋さるわ 秋
文正の秋さるわ 秋

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

茶代の古名を置くと呼ぶもの
 雙女をよめぬもの 雨衣
 田子の浦波うらまをうへ原持来
 不ぞ尾をうらまの舟の舟
 お八海入りをもて後みうらまの疵
 松の根まらうらまの孫と
 清く走とや心女の夜をうらまをうら
 尾燈の燈とて 月
 系をうらまのうらまのうらまの秋
 涙をうらまのうらまのうらまの秋
 衣をうらまのうらまのうらまの秋
 白いもうらまのうらまのうらまの秋

路の方一巻二百巻と云ふ
 氏いぬハさひふめうらまの久山
 今のかたをうらまのうらまの久山
 幽霊と云ふうらまのうらまの久山
 其縁の橋の上うらまのうらまの久山
 初會をうらまのうらまのうらまの久山
 祖父祖母とやおとや若とて
 被をいぬうらまのうらまのうらまの久山
 米袋のうらまのうらまのうらまの久山
 木塔のうらまのうらまのうらまの久山
 韋駄天と云ふうらまのうらまの久山
 如きやと云ふうらまのうらまの久山

七... 追子鳥... 波の月
 す... 信人... 秋の暮
 物の... 振... 波
 木... 瓊... 端の雪
 人... 秋... 阿...
 ... 千... 昔...
 ... 茶...
 ... 海...
 ... 入...
 執筆

延享六戊午春

さ... 秋...
 ... 山...
 ... 浪...
 ... 友...
 ... 秋...
 ... 秋...
 ... 秋...
 ... 秋...
 ... 秋...
 ... 秋...
 ... 秋...
 ... 秋...

信章

信德

楓青

...

...

...

...

...

...

...

...

強田殿進退おあをたのわかれ
二人の若女浪人小姓
牛三子らきれうも山崎定
清けわつげ張さりの母衣
心をあのみさのほくまをハ
浪せき入る大釜の洞
若徳津地獄の底くさうけさ
強扶解のりひを碑くま
酒の月ほ妻赤の河振お
陸の内俊お宮の
肩を取袖さうさる花
中風もくハ世帯一おさう

春 徳 春 春 徳 春 春 徳 春 春 徳 春

瑞の尻入りのゆき雪をけさ
のり屋のりしと鴨の写るお
山うけの精進さうかめさ
三十三季秋取てさ 虎
子帳や信成仇のちうけさ
宇草は清海の小僧新者意
いらは顔枯之山とあうさ
雪を雪掃く外白濁 秋
新ひさる長月法の春根あ
時のおきお取さうさ 松一枚
竹鼻さうき雪さうさ 峰崎さや
まういさお母 橋のぬけさ

春 徳 春 春 徳 春 春 徳 春 春 徳 春

三
傍をくも人しつらふこと久し
悪鬼と名く姿ハ千まき
正之りたまわれたるものか
くはに花喜うはれとてさ
あハに東叡山の大殿き
花のさうりに所中をもふ
青極の髪中いししや
有景子あつた際うら
まきしとて吹くふの性
先きうのり子あつた
恋のふちをれ臨しそあ
ゆき中使風の玉

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

三
心中の山林竹木振まると
末寺の宿及菩提下の月
十才の和尚のうら秋あけ
疎院ハうらさる清やま
暈のいり担解の店の風
このふよのうら暖簾の
恙の洞ありあつた人
着けの思ひ性うら
うき中ハい進やうら
あ(の)あつた宿汗うら
志あひあ大般若の書お
翻了信正床入の山

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

若くはうの山の麓に坐すハ音を即
かつすすのしや右道ありん
その月橋の精所くを舞へ
すも山も志は成佛
又性の眼の光く陽の輝
舞糖の光く因果すふくら
志のやとさなすの理のよの
志きうのしと十景目とこ
大八やまの山守の忍くん
日産をぬしとみうの信
山の柿 輝の尾くけ
青の雪の目白羽のさく地く

青の雪の目白羽のさく地く
山の柿 輝の尾くけ
日産をぬしとみうの信
大八やまの山守の忍くん
志のやとさなすの理のよの
志きうのしと十景目とこ
舞糖の光く因果すふくら
又性の眼の光く陽の輝
すも山も志は成佛
その月橋の精所くを舞へ
かつすすのしや右道ありん
若くはうの山の麓に坐すハ音を即

邯鄲の里の新花月明く
 よくく() 柳のハ舎をを飛ぶ
 糸白より十方候も鼻の先
 糸おろしつたのち武吉 藤
 音楽の小鳥三味線あいの山
 四折さハく牛の如く 流
 姉妹く佛伽は丘尼のけりとも
 信家そそぐとの佛もくすまき
 けつき一黄蓮の膚くわうり
 小娘みよふの草 袋み
 松林油くきくやきく姉らん
 弱く飯ゆちきく焼く

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

くのきくくはく() 汁のよう情
 恋理の若花のく() を持く
 空や花白未く() 候弟のく
 信 ちく 帰() 羽 第() の 尾

寺 寺 寺 寺 寺 寺

同年春

物のりよと増や古郷のいのけり
 作くちをく 百 野 里() 喜
 峰() をく() のく() 難() 多() 神() 々()
 子人力のち風く() くる() じ
 能つ() のく() ち() へ() のく() ち() へ()
 あり右を 望() ぶ 柳() 々() のく()

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

竹徳

柳青

竹章

竹

竹

竹

吾の誓葉のらちのつらひと
 尾花の初子鏡かきり
 吹とんいひさる風のまきり
 丈ハ山伏法師のまきり
 一念の禪と毒と七まきり
 かしらハ鬼の穴神いこく
 残ふり侍あまきり
 神のいひさるこきり
 魂とこねのまきり
 伝石とまきり
 骨つき忍びのまきり
 之ちつらまきり

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

夕言山風を伝ふ水の月
 本歌ささきの紅葉さき
 花子風所きらんを
 梅子つらまきり
 了侍侍信令子つら
 勤田ゆき二月申旬
 釋迦殿子法式儀
 八万能聖師古多解
 張張ヤ十方世界の
 んいのらハ春去の
 山の中ハ地獄受れ志の秋
 らはくぬすん杖をゆき

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

約とあつては読あしとてむの言
東坡の十の竹の一作は
其里の石すりの文のよひん
瓶子の海本紙魚のさうさ
去用志れ山を紺城の青何し
谷もたれえと美砂のて
吹矢をたて思は海舟内
秋の名海の家をさやね
ま川中流む一曹たふ
巻もをまてきしまのれ
そ業平の情人やふふ

徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺

本城色は竹名竹とて言は
ひんちり林は社尺のき
物やうしきり野のまの
松江の海はあ店り 嘯
めし桶と鶴のまをみつみけ
平月白うらむくの思 鯛
花もさしん我のむは読の
父大徳のまつあや 妻
子花や十二のくさうさ
笈の中うき山め月
お男麻の妻をさしれれ
る儀のお鶴むし 中のか

徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺 徳 寺

關和子の拂子窓より子母家
火付の巻より徒内くん
本三佐流子と法よりくく
真の巻や飯おこりあ
かこく可子難波の梅井兄弟
巻より巻 卯吉の巻
そはのくし陶の巻あそめ子
温能きりつ巻より巻のら水
物より中の巻は子引く
巻のやらんく神より巻
買う可巻は如法巻を付く
川の大き巻より巻の一巻

巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻

物は巻の三巻は伊布きり巻の
巻巻やんくや巻は破くや
小巻めは巻の枝ははら巻
減金の巻は巻は巻は巻は
子母巻木は巻は巻は巻は
巻は巻は巻は巻は巻は巻は
巻は巻は巻は巻は巻は巻は
巻は巻は巻は巻は巻は巻は
巻は巻は巻は巻は巻は巻は
巻は巻は巻は巻は巻は巻は
巻は巻は巻は巻は巻は巻は

巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻

名
 ちかおの音もよみしひやまのうすむね
 枚子ハうけつハ足ぬひうらつと
 良志付し下女とくしの戦ひ
 赤赤しれの旗もあひうす
 酒桶子引等の一向志矢され
 情以ハ人そ穴とら
 巻之うす破れく言も好し
 母をうめ終る末ぬ夜敷橋
 甲こく瓜の先ちく心ぬ
 志のふくこくおきく点と
 恋弱し内親王おしと紫
 乳母さくあつハ思うの揃
 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

疵瘡の神思非あつても運の月
 ましてや面を張替のあつ
 弱子布の衣巻をひくつ
 松をいく代の喜強在あつ
 水障の衣を嵐子あめれハ
 くれう枝を淡く一子あつ
 火雷にらを踏ぐひく
 若く至おと本所め末
 江戸の系正我の末の叶とや
 海白くもあつらう方末
 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

同年秋

衣をも肩すうくはれ仕合
 酒子乞白雪帯を海をこり
 秋風起てわうよす棒
 舟遠をも舟のささくハ忽ち
 尾を引すうて森のふ子
 御神龍別花ハ委もよ
 つくしとてこの子まを飛り
 旗けしる二つ玉子かひるそ
 うらわさく度ふ玉のかくそ
 空降す伊との帰樹とお渡り
 しみ石あらし中ハ十六
 山傾り現すくわうひきまると

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

言わぬ所といてやは毎子
 物あを都の西子まうつ
 玉子の帰れ古を流るまう
 友園の二結一足や脚くん
 言舞わくとも疎ありまう
 秋の二相見火入をさけくはも
 格条子の袖く月をちる
 思ひ返れ世方の妻あつふ偽し
 言峰眼すくくくくくく
 薄情うまうまうまうま
 思ふもくくくくくくく
 逐利の法を裳めけく成り

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

親仁は説法ゆへにまきくは
 孫小紋の羽折ハ星子海の
 けらきくれ縮の夕神の予入
 管絃を木幡の舞やさうさ
 智蘇ハ所れとも毛尺を替ハ
 緋の骨ゆへともゆへし里の月
 又まけしきし丸山の色
 片菱燈籠の赤花ちきこ
 うすみの宮うら縮のむちり
 三
 主まや系掛付きさうゆ
 段引御守きさぬ
 信併うをさくさまのふ殿系

けく 兵 輪 大 松
 母あたる先をいけんを替あけけ
 茶うのハ木木おきおゆま
 因采笑釋の無をまきく
 善男吾吾甲 説きま
 又まき孔子字ハた二郎
 みきゆをゆハ首すお雙
 不心中まきすしりさ何うまん
 君ハ作篇系不さゆり
 まのふねハ取まきしりさ星の月
 秋を通さぬ中け舞
 家滅の貝さふさる部鼠

三十一
 九

石之川ぬきゝ山本の寺
大地を履つてゆく龍やの海へむ
長十丈は鮫ふりくく
かたはりの橋板をく尺さし
魚舟漁るもさう糸色丁
ぬれ梅や少くもれは手鹽此
杉櫓こぼれくお角ゆきん
古き伊勢の山はやふ兄
河内ハ幸ふとく此秋風
さくれてを飯匙^{カキ}のほろ神の香
白き溜みく胸くらす月
狩守のさす姿息花とふ

喜 半 一 瓜 瓜 一
新 是 此 怪 象 多 子 子 子 子 子 子
代 八 車 沙 幸 ぬ っ っ っ っ
何 二 十 三 係 の 与 之 印 大 細 之
た っ け 狂 じ け け け け 軍 一 け
口 舌 一 一 古 後 折 一 係 一 一 一
ろ ち の 一 一 一 一 赤 心 一 一 一
是 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
意 子 別 又 狂 一 一 一 一 一 一
唐 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
殿 部 棧 一 一 一 一 一 一 一 一 一
我 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

けんとおの葛まや山の端はき
 小舟のちりし溜の月と月
 展平沈む新葉の家
 夢風と山を越えかたれ
 かくらくおと下おとや
 けハみゆうふ人形は風も
 海士のまじりハ新のよとくに
 何れも舞せ火下何れもねと
 八尋豆腐みこもあ
 面影はねるハ大根花え
 あくく陰も子うまむねの月
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

同季秋

のおれく初め大春江戸の秋
 何れかともを金ね月
 菊やとのあつてきり
 酒舟は流ハ汀浪とす
 碓のねくいさうハねね
 与儀のやまのさゆ境入
 とやうとあもやの上ま
 いつとも神さね
 伊阿うさやそお強ハ
 何れも行き渡りおと
 ちりしおまきづのまは
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

春燈

三十一

舞かろしき山は花のうらな
 和作ししは花のうらな
 被のふまきそ寺の柱は
 小きなほそ大木物しと思
 鬼くくすそ生捕りて
 天も花を毒の酸粒力なり
 飯のこころはまきそふゆ
 ありそふ猫ハ節く神くきし
 廻つ心のいりそふもふ
 瓶の中しそ名もふそ草はふ
 金輪際ふそ山ゆふ
 畏河門は神のまきそふ

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

かそは首の首うらな月
 春 舌をハツそふけふん
 去折文そふそふ
 果物拾迫り歌をそふ
 古川のそふそふそふ
 先多そふバウは二けん
 日待そふそふそふ
 やすそふそふそふ
 知のそふそふそふ
 肉熱そふそふそふ
 松ハすそふそふ入
 花ハ心油ハ降の長縮きく

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

納多よし 香るるあさる
海もや松のあけの悔むん
嵐 阿比ゆく 謝の又浪
於小舟 米俵の泣きひき
花も 籠も 多き生 けり
とぬいれ ぬいし 女 貴族
大海 くるい 口 くる 家
一 夜の月 合の 刈ら せり えて
ば ちち ちち ちち 小 男 兼 角
教 芝 居 ぬれ ち 柳 の 中 の せ
在 心 ち ち ち ち ち ち ち ち
二 麦 飯 の 井 や 麦 子 雲 ち ち ち

浪 春 浪 春 浪 春 浪 春 浪 春 浪 春 浪 春

妙 ち ち の ち ち ち ち の ち ち
幽 子 ち ち 海 舟 ち ち ち ち ち ち
さ の 休 月 ち ち ち ち ち ち ち ち
殺 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
聖 天 奇 ち ち ち ち ち ち ち ち
帳 師 の 志 欠 ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
既 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
將 の 力 様 所 ち ち ち ち ち ち ち
ほ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
三 ち 男 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

浪 春 浪 春 浪 春 浪 春 浪 春 浪 春 浪 春

朝の床を走るる一鳴
 産むす浅みらる一鳴
 ききしものきき天のうく山
 休ほ暇のよめり時をもとこ
 古葉すくえり仲人のき

桃青

同
 宮や内下の子金の通る町
 夏す敷きぬ看板のき
 新葉もや三馬かられ子回お節
 芦の葉らゆりし味るる浪
 甚や樹新し小舟よぶ之く

二葉子
 上尺
 二葉子

一男すくえり名と布そのの対
 糸ものも光悦流るるれ
 葉草喻示くすりし
 玄諭の強地ぬ奴もき
 ぬをとるるすく 緑青の山
 隈との峰より内なるる
 秋をす布北庭の山風
 枝もの朝陽のききまられ
 精をゆけれ三位入 花
 かとちぬるるるるるる
 又厚きく 陸子くなく
 亭はたわら金子をねるる

桃青
 上尺
 紀子
 二葉子
 上尺
 二葉子
 紀子
 二葉子
 上尺
 紀子
 二葉子

後多能衣おもくつけつ
嵐とくくは籠も力の入るや
残燭けしきハ勢ゆるし
何れにやい女、枕の初尾を
百あぢくさくたさ少れの秋
仇一吾をかろこの釋の設けハ
あゝいハてゆら十六 露海
又男と密かゝらハかゝるね
古の羽折子 志そし〜
つく〜と泥命のやをこ梅さ
弦の〜とやぬさ〜き〜の
強か〜る〜や〜る〜の

書 書 書 書 書 書 書 書 書 書

や井子さるる所の 細
料理人沙あをきく露の浪
木を厚の扇けのま 風
^二佐吉のゆ干子尺〜ぬ小刀砥
海の娘お 踵ものをもとく
き〜に襦袢と袖も 寝つ〜
枕あ〜〜〜 寝ぬけゆ果
論とつす天のぼろ〜中 籠て
経のいお〜子 踵を〜
滑川のい〜子 艾子火を〜
朝と家〜〜 雨 帚の 風
い〜き〜〜利久〜〜

書 書 書 書 書 書 書 書 書 書

三十八

三十七

道へ橋をまきしるも海は口を
夢傳のつらうよふまはりの
親父の飯きしは新はりのくそ
きたはるまけ徳岸より虫
我月や赤州黄氣煙をまき
子産さひし一葉のふ家
はし月をい美傳の口もものをと
海はらりたてぬつたわらぬ
舟掛はるまはるもあつたまはる
四里の舟はるしる一舟の岩角
又版をいもはるしるたてぬつた
松のふらりしる下舟もたてぬ

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

まきわらひ張お波のよ安貝
灘は増屋の橋のよの庭
破小舟削きしけきそをい
本城子しるしる吉砂地の赤
そをいしるに築きし庭の月
かきしるしる木をいしる山の新
味増すまきしるき松の谷傳の
三子せ川のいしるしるや傳り若
つらしむら大妻の門や火吹竹
みしるしるあまのいしるしる
岸くもいしるたてぬつた
寺の里橋をまきしるの喜

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

三
 常水や流るる胸平流るる
 羽第一と終ハ風まらるる
 直らるる水一とて竹の波
 夕白く流るる袖通し流るる
 小徳利のおかとりとわやわ
 いろくさぬ松を俵とも火
 下るる水はわりの足小半の蓄
 幹水の桶おかるとも
 上方のかく記まぬ使とて
 ちよとてゆひかきとて
 縁せや二度うらるる
 若くともちやうとて
 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

三
 定稿のまゝの少袖を引とて
 一汗あきとて菅川の月
 三
 手拭の帯手浪やよきとて
 ちね罪障とてとての淡
 とちけき死の海をたてとて
 もと小半みみとて西月とて
 開闢の天地既とて大孤張
 若くともかきとて
 つとてん鬼の目とての袖
 花の心の燈とてとての
 茶刀の先とてとて
 湯毒あやあ植のつゆ
 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

三
 女ハ赤く子もやふくしむ
 さ月影く後ゆひくく恨
 くらけ猫の月を背けり
 家より菊の具易別易志
 乳牛の穀の留の暮の葉
 去秋を花く食よれいふ
 白魚をかきくく餅菴の家
 実吾れれ人似他合をり
 徳士提灯を枕くけり
 くらけ多うく女身のあふ文く

青 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

血柳は病を夜や思ふん
 くれましむくく悲くたす
 因樹の山をものくくむ
 天帝の目安をきくくわ
 桂を垢くく早寝をりゆ
 市の旗子風のかまのゆ
 秋千對くく和帝の記
 白く親仁紅葉村くく
 滝の火新能くく
 師魚の諫め履ハ胸を刺さる
 安方の岬くく法人必色信
 向はくくはくく

青 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

柏杞子初芳其魂鳥の魄
悉人其被予仰るかり夏外
而るるのり可多風の委
夕暮る其り控るを吐けり
民屋何のり服をせとむ
吠心の木熱る子此地、時く
まゝの家わくく安波の古是
有尺き心言解るる向晴る
あゝれと文をわくく物ま
従軍し小袖る何とものいぬ
的取おるる予とくめわらる
花と思^{カハラ}神宮此方特あり

青 水 青 角 水 磨 角 青 磨 水 青

帯子柔作の託の鳥

同

原平の^{カハラ}子^{ハコ}文^{ハコ}字^{ハコ}を^{ハコ}し^{ハコ}ふ
まゆり^{ハコ}と^{ハコ}給^{ハコ}原^{ハコ}も^{ハコ}く^{ハコ}る
下^{ハコ}り^{ハコ}以^{ハコ}終^{ハコ}多^{ハコ}と^{ハコ}有^{ハコ}受^{ハコ}る
月^{ハコ}を^{ハコ}ま^{ハコ}り^{ハコ}る^{ハコ}鳥^{ハコ}暢^{ハコ}と^{ハコ}か^{ハコ}る
海^{ハコ}り^{ハコ}陶^{ハコ}を^{ハコ}あ^{ハコ}り^{ハコ}け^{ハコ}り^{ハコ}也
秋^{ハコ}月^{ハコ}の^{ハコ}ま^{ハコ}り^{ハコ}る^{ハコ}心^{ハコ}子^{ハコ}此^{ハコ}地^{ハコ}を^{ハコ}志^{ハコ}す
以^{ハコ}や^{ハコ}り^{ハコ}山^{ハコ}海^{ハコ}子^{ハコ}路^{ハコ}と^{ハコ}る
夕^{ハコ}の^{ハコ}海^{ハコ}を^{ハコ}吹^{ハコ}り^{ハコ}か^{ハコ}る^{ハコ}木^{ハコ}を
於^{ハコ}監^{ハコ}松^{ハコ}風^{ハコ}の^{ハコ}多^{ハコ}を^{ハコ}あ^{ハコ}り^{ハコ}也

其角
才磨
楊水
桃青
角
青
水

木の合とわしく翁受りては八
匹引のちまきへ再りて後立
自の秋いりみえりては且夕そ
翁子志しりてむ妹の首髪
よのしきく後子息の幼くんよ
経と風子りて無常りて位
小納りて木枕に布きりて記て
納戸の神を肩りて糸の
煤掃之禮用於鯨之脯
庭心の翁園原いりて入
風いりて牛走りてあうらに
蒼石子りて女枯床をたぐ

角 磨 水 青 角 水 青 角 水 青 角 磨 水 青 角

四十一
平

襟いと白首の孩聚けしはさ
りり利新後をよむ衣長し
得小僧豆鼓子月の詩を割む
膏を写りて芭蕉子りて風
花のそ約冠子羊を直きりて
機子子籍を一つりてしら喜
三
お布りていしきりて古寺の香を掃
箕をくきりて音くをむりてかん
布りてしはかりて枝の葉干せり
山を踏を抱りてりてり
思ひあきりて地をりてのこし
木柙のあれりて木爪の唇

角 磨 水 青 角 水 青 角 水 青 角 磨 水 青 角

四十二
平

洞窟より鬼灯の灯籠思し
踊鶴衣此裾子一川の浪
海の月佛伽坊主の夕榮
古葉まじりやる美の泉水
河骨死葉に浮れ葉を古や
ほあらし子多し地火と化
築地河の根の底の車列と
天火の闇の金けり。号
三
枕江の磯の岸のホハ志く浪
青の海苔くくし海苔を子
花の蓮花を干花の賞
月子秋とふ春金の作

角 磨 水 青 角 水 磨 青 水 磨 角

きんきん波を夏まかす巨徳
夕うほやもく夏花ひしけり
柳の木子増ゆしらふおろ福之
枕の清りあま葉あかくむ
管の糸を白と松魚まき火魚
糸一可佐をひききとあふ
出つゝを蹴拵うれて念母
泥坊清り雨の火青し
字のれく下葉う葉う葉
秋の里お足りし以 瑞
配西人若の小忌布を干し
河くあふ花蘭 幸塚を枕と

磨 角 青 水 磨 角 水 磨 青 水 磨 角

四一七

河津のほとけの寺に八雲子と書ける
能くすいすい生海流漸く
空の字みよれの空しくあましくハ
蕨菜の寺子題を返る
赤やつこかられたる凡体林と呼
びしり物おををををてあまし
婿—きや中府のせやくはけを
急ゆめれ—く才子計り
あましく桂の戸板をこらぬす
松ゆく右子あましく心か
髪結の位をいぬハ蓮—く
卒都婆の男ゆり—物きり

角青 女角 水 廣 角 青 水 廣 水 角 青 廣 水 廣

骨刀かたしけ路のまらきし
瘦—く—くの氣子—瓶—く—つ
肉子たぬえも—く—くハきのハ霧取
米—く—青け耳—く—あけき
さくもかびく美子たきく秋—く—
早稲屋士—く—おき—く—月
早耕す青磁の歩子花—く—け
墓—く—あれまのれ—く—む
^二辰宮の敷入をや—く—路—く—
神—く—や上おけ—く—あ—く—の—く—
院中—く—を提了花の雪路の忍—く—
提灯—く—つ—く—あ—く—け—く—

角 青 廣 水 角 青 水 廣 水 角 青 廣 水 廣

五十一

風おの角内くぬを怪り
入の山子み根子
雷の斧丁こり
言く又言
俗のしふ麻島の海は底ふ
郭のりお東ち地赤
何を受り
ひるのく
有を草又草の葉此片斬端
栗可り
雲霧の卵の心の敷
お返起り

角 青 水 磨 青 角 磨 水 角 磨

登りふ人ハ志のいふふり
穂を
古家のほろ
い
麻の葉子生り小餅を
あ
き
の
屋宇の食く
人死を待り
石曰花のめ
木あり

角 青 水 磨 青 角 磨 水 角 磨

五十一

五十一

三
飛鳥其ノ如ハ雲ニカシキツ
強クノ進ニサル所キラクシ
大根の葉越の園のさあさう
雪のかけ鮭ノ久甘くやう
おとらくや火桶の姫の腰
ろろのしん床子藤巻引つ
まやしくお入るくくくく
通す首のほくほくすむ
おふひしれ根々よめけ塚
横やぶるし今海ありし
くくくい有る村風とや
優しやすき海とほす

角 青 水 廣 青 水 廣 青 角 廣 水 廣 青 角 廣

三
秋の葉は紅くももくく
任持ゆきしりり葉は戸
葉しらくも物もねひし
海むらりしりり海苔の葉
急崎の松、娘は花の葉
まの葉子、葉る雪のゆ神
ト曰く海苔の葉は走
地の葉はまの葉はね
無縁の葉居るはり張性
清き水の目 麦 穂
つゆも葉は味方の葉
志尼 叶は叙り

角 青 水 廣 青 水 廣 青 角 廣 水 廣 青 角 廣

新なる、昔より花見の、其むし
狐、ハ、碎、く、醜、醜、く、入、る
角

同 舞 舞

附 贅、心、の、ま、り、置、く、回、く、家

楊水

名、用、の、枝、を、ま、し、く、不、景

柳青

夜、島、村、の、人、あ、り、ゆ、く、ま、ひ、く、
春、一、裡、の、甲、虫、も、も、と、隠、る、こ

其角
才丸

天和二壬戌春

康城

綿、く、ち、り、り、と、ま、む、百、つ、り、
そ、花、休、く、く、こ、春、山、女、記

子春

風、お、き、之、陰、の、花、を、や、く、く、け、く

卜尺

雨、双、亡、り、雷、を、わ、す、り、く、
宵、く、く、く、露、の、凍、を、退、く、け、く

曉雲
甘角

せ、ん、く、く、く、く、の、ま、り、月、を、は、
冬、方、ら、く、く、空、や、海、の、花、を、畫、く

素筆
似春

村、村、く、く、く、く、の、ま、り、文、を、恨、む、あ、と

非雲

煤、酒、旗、く、く、く、く、を、す、く、む、
あ、く、く、く、く、の、ま、り、山、崎、小、海、寺

言水
孰筆

靴、あ、れ、塚、を、回、向、く、く、く、
袖、桶、く、く、く、く、の、ま、り、女、学、此、所、を、れ、お

樹
子

小、海、志、爪、白、母、を、ま、く、き、む

尺

悴く海の聲をききわたり
於瓶の精を以てくたし
の御坊を打海を言ふの子
ハ夢の力なきを揮く
味も枯れぬと家法をねのりハ
泣くおのく女
あまの花訓の足入ハ
杖杖の地をきくこゝろ
^二功片の形をさし
飛書子系ハ佛界ハ飛
拳の代ハ隅の所ハ幾ハ
妙の物言く玉おハ一樓

曉 暈 角 昨 似 子 樹 曉 角 暈

玉液清く玉瑤の玉瓜ハ玉瑤
故の春ハ遠ハ血を少く
夜ハ解蟻の備ハ始ハ
棍のうくまハ以ハ切ハ尺ハ
自落ハ春ハ海を貫ハ
強盛ハ喜ハ海を貫ハ
嵐ハ文破ハ夫ハつハ
澄の桂ハ餅ハ餅ハ
赤の玉葱ハ夜中ハ帯ハ了ハ
猫ハ口ハ舌ハ舌ハ舌ハ
海ハ口ハ舌ハ舌ハ舌ハ
義ハ口ハ舌ハ舌ハ舌ハ

暈 暈 角 昨 似 子 樹 曉 角 暈

消ゆる子嫺の幕の夕ぐけ
火縄のけし一二寸ほど
何もの、後め拵する花のけし
江戸より上野ふもとへ

目

夏よのきり香を寝たる心、如
夢よぬく、俄細む、俄
落の葉子、海濱竹、花を綴る
弦よふ、花色よとく、黄たる
面ほ、花の、現なる、
さくく、二十八針、きん

も是

一扇 麩附

きささ、
後家師、吳雨の翠、海よ、花から、
かろくくも、
文くくく、
新く、
一箇の、
不荒く、
そ、
ク、
味、
花、
甚

陽片の具履履居作りの大工
嫁の嫁衣百千の粟
とぶのくくは是若の袖を引
様りの坂は清なる溜りの
無り候の甲を初りのり屋
餅をおひする大寺の
長史ふる乞食ハ家の榮竹
子あをふとく牛菜の葉
崩く頓ハ又多此婿を
古佛の般平候者をし有
名をしとれ荒山伏の袖め
仲白雪の后こう

らきり雪牡丹ハ屋の如き火
白袋袖躍りや免
系は免了己解とく雨降れ
又新長若且あつらん
丸つは鼎く赤ふ花を煉
序をさあや友の文橋

同
柳竹垣穂千木瓜も骨赤う丸
笠おしーらや卯の穿むる高
あはしる雪う梅を掛らん
市千小空をさふ新月

栗樹

一品

芭蕉

樹

良室の庵、少油を打つけり
紅白の菊、風を基とす
新なる卯塔、西のりそとく
今人の極を可うとす
梅弓は反た、休庵をさす
上尊の神とつる子三線
くまの襦も、籠干、彩
密丈、能よめらつた
朝のぼる、みよ、起す
くま、戀まき、昔のり
母の親り、あま、肉を
くま、能く、くま、能く

樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶

通釈米の踏音花を祝く
梅咲、清く、泊り、たれ
ま風の池、院を、あ
かす、す、縁を、告る
院の、ゆり、餅米、芥
菜、漬、け、た、り、漬
け、の、梅、燈、の、ま、き、や
梅、野、を、た、り、そ、の、意
新、き、塚、地、を、く、ま、の
意、を、後、好、臣、り、く、ま
の、意、を、和、く、ま、の、意、を
飛、娘、も、た、れ、ハ、油、を、く、ま

樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶

六十一

十原の二十季を老の九十九髪
 室のくくらるる念佛 去をく
 遠生を火を消ぬ末をうら
 智故ろを盡す 行 規
 高古此時おろし海を霞をつ
 杉子集をももつ 幅端の子代
 佃田の穴を花の浮粒人
 了跡を被 おくる 喜 凡
 了和之慶交年
 花くくくや無家海走らく食馬
 所くくくを盡す 陽片の瘦
 一品
 芭蕉
 晶 晶 晶 晶 晶 晶 晶 晶

朝陽にて青海をくくくく
 寺子 孫をくくくく 梅
 月を満す けの舞をくくくく
 眼のくくくくくくくく 菊
 管毫後ふふくく 朝花時雨
 朝のくくくくくく 秋 衣
 浪人のくくくくく 冬 石
 や子のくくくくく 春 山
 花のくくくくく 夏 山
 有ハ退之ハ 肝視をくくく
 雷々の初きをくくく 冬 山
 夕照 海子 松魚 厚 山
 晶 晶 晶 晶 晶 晶 晶 晶

整情の境を接し衆代より
用織り角と可く風俗極
何し聖の格をわく字の月
破道強く詩の上を次
物解子西瓜を踏つて
つくしきくめりの松海片横
欠つた尺の楊屋くり萱底
君ハ私にささくき後の心
松入ぬ糸ハ六十の荆うら
海所より故すうく表と東し
人の格受種長の宵の扇子延く
松たぐいふや雪のゆけを此
晶 角 葉 雪 晶 葉 雪 晶 角 葉 雪 晶

きくしやや時中も似やういふうく
小野子知る餅を食る
空井の月より表く足後よ
木城ハ武士の横 叶
尺くしき巻書を鏡や柴松
多心さんや工陶つは月山
岐の霜をを母子受されく
強く 表心あすすりうら
花を 柘原山の列をく
梅子すねる瀑布を酒飲
晶 角 葉 雪 晶 葉 雪 晶 角 葉 雪 晶

同

酒債尋常性處在

人生七十古來稀

其角

詩ゆきんと手をも食つ酒債如
 舟一湖日暮ヲ 駕レ馬ニ 鯉
 于此き夷子園をゆきしむ
 之綿人の鬼を泣し一骨
 月ハ袖をろき御の膝の上
 時ハ胸をさす 夜海をこ
 和ハぬ唇をもさす可叫 芝
 叶向ふさばかしくさきも
 毎竹のとてをさす海を
 時時のをさす居居とを

角 魚 角 魚 角 魚 角 魚 角 魚

一の非里の良家の善くは
 斬居りし門下を責む
 浮考し志の心を食の腹
 出を花負守りてさかん依
 芭蕉 阿の城にさかん
 腐れし何れも喰ひしや
 解くこと 不富ぬ秋紅月
 算入のを付すくす 碇
 泣く山止る鳥さすみさし
 嘲りニ黄金ハ 鱗ニ 小 感
 是飽くろし おとさめ、乳

角 魚 角 魚 角 魚 角 魚 角 魚 角 魚

枯葉髪紫螺の角を煮る
 鹿神を使つて荒海をよ
 鐵の弓取にけきやうかよ
 虎 猿 子 始つてあつたき
 火 燭 燭の床を吹却し
 下月后糸をねむるを
 西瓜を綾子つておもしろく
 表のうま味汁のほろ吹鳴る
 みられくの東 一 石 向
 武士の躍の丸角 枕 可す
 八重の釣れをよと告つた

角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角

付あきんく花を食ひ海徒外
 春一湖 日暮る 鷹 無 吟

角 並

同

一季三百六十日
 海口の吹雪三日
 乾やぐ事やしく向け暮きと
 女をきく浪や大根よく舟
 舟をきく舟の海や枯つらん
 舟をきく舟の海をよみぬる
 舟をきく舟と秋をよみぬる
 傾婦を葉の替りく

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角

榮生^三のあもを女御ぬ奴^二に^一きん
す^一張^二のあ^一る^二字^一あ^二れ^一お^二お^一
寸法^一の切^二の^一衣^二れ^一み^二の^一た^二ら^一不^二
昔^一を^二力^一む^二率^一初^二後^一大^二小^一
侍^一の^二多^一門^二を^一足^二を^一よ^二る^一の^二や^一
凡^一丈^二三^一百人^二の^一事^二う^一ら^二ぬ^一

寛文十戌年

助勝

果^一と^二居^一も^二さ^一それ^二之^一肌^二を^一ぬ^二を^一衣^二
及^一走^二り^一可^二得^一ず^二ゆ^一ず^二玉^一民^二
か^一け^二作^一り^二何^一事^二お^一も^二し^一に^二足^一後^二引^一

宗房
正助

同

長忠

披^一ハ^二家^一の^二玉^一あ^二た^一力^二の^一一^二葉^一切^二
と^一ふ^二の^一美^二の^一影^二う^一つ^二よ^一ふ^二秋^一風^二
冷^一し^二き^一石^二は^一さ^二あ^一ら^二う^一う^二鹿^一子^二似^一と

宗房
定就

同七未年 一百附

肩^一の^二急^一物^二う^一ら^二も^一の^二い^一は^二足^一難^二不^一
と^一を^二た^一ら^二し^一け^二と^一あ^二の^一お^二り^一の^二家^一
好^一生^二好^一の^二い^一と^二み^一さ^二あ^一ら^二い^一の^二い^一
志^一和^二の^一鈴^二あ^一ら^二い^一の^二あ^一ら^二う^一の^二つ^一と^二か^一

宗房

宗

鶴、一羽もたれずさつし、
柳、老れしうらうらと海をかえん
坊

延喜六年

大抵、肩の軽くも、
故、千さくれ舟田子の海女の
祝書

虫の聲、白雲とく、
瓜の井、ごの、
〆

孔子、鯉、
お題する、
〆

院、
〆

梅、
〆

仁、
〆

大、
〆

確めしむる集りや入ぬらん
大伴多良麻呂とある言の御対
或る少くも引くつらむと云ふ
敵よりつらむをたきし尾つぎ
桶ひとも物の言をこととある
それ人言をぬらふその出
るの昔うらふあはれ秋あつら
るる細歩ハはつらの海浪

あまのこゝろはこれの如くを装束
中へくつらむをたきし尾つぎ
くあつらむ既に中をたきし尾つぎ
御あつらむをたきし尾つぎ
砂川くつらむをたきし尾つぎ
此界をたきし尾つぎ
あつらむをたきし尾つぎ
紛績をたきし尾つぎ

上ハ船き〜中ハ竹 葉

夏中ハに張子わ〜の程さる

中ハかまふ長持の〜

送る指さす〜

島ノ物をもて海平流の〜

女院 活〜の二位ノ尾 鯛

大正の退屈〜

信長 後ノ七の〜

旁ハ〜の〜

みの〜小櫃〜玉の〜

子 響〜の〜

草 葉の〜

野〜の〜

是も又〜

ら梅見〜

昔 托〜

多うあられハ松海ノ中ニ印ニ糸河
之ヲ舟子ノノリニ居ルニ糸橋

丁和事申

伴賀師集物

栗吹志山翁余尉ハ秋ノ了河花
自紀飾ニテハ秋ノ了河ノ松
師幸庵ノハ意ハ坂ヲゆるむらん

青府

一糸

桃青

天和四甲子

昔是時ハ冬ノ白ノ子難之トシ
月ト糸架を海ノ色食

春のい

芭蕉

枯枝子時ノ冬ノ了河ノ了河
珠ノ了河ノ了河ノ了河

芭蕉

素堂



